



Title	平和とは
Author(s)	安井, 幸子
Citation	架橋, 8, pp.111-134; 2007
Issue Date	2007-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/25982
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-24T20:18:46Z

平和とは

安井 幸子

みなさんはじめまして。よろしくお願ひします。今ちよつとふれられました。私は大変そそつかしい人間でして、猪突猛進という言葉があつて、今年の干支はいのしだということ、みなさんより一足先に、何とか急いで何かをしようかと思つて、去年の十二月三十日家の中を掃除して、ほんの十円玉位の水溜りが廊下に落ちていたのを気づかずに、その上に乗つて滑つてしまいました。それこそ猪突猛進。そして前歯が二本飛びました。残りの二本が折れました。前歯がないんです。ですから今日はちよつと話がしにくいけれども、今まで普段私なりのお話を進めてきましたので、それをなんとか思い出しながら何とか皆さんに、私のお話が伝わるようにと願つております。実は昨日長崎の原爆病院へ入院いたしました。明日が手術です。右肩の三方所を骨折しまして、今はお薬を飲んで二時間の激痛を抑える努力をしてこの場に立たしていただいたこと、大変私は幸せに思います。

それで今私たちがどんな気持ちでこの世の中を生きていけばいいのか、今私たちはどんな世界の中に生活をしていゝるんだらうということに敏感に感じ取れる、そういう人間でなければならぬ、世の中から私はそのように感じて新年を迎えました。

いつの時代にも、いかなる多少のわずかなことでも平和とか平和のおもりというものについて、ものすごく願ひを込めて平和希求をする、そういう尊い願ひの叫びはいつの時代でも上げられて参りました。私たちは、とくに皆さんのお若い時代これからの世の中を本当に平和な世の中としてどのように守つていくのか、守れはいいのか、守るべ

きである、そういうことを考えたときに、かつて世界をあのようにはさばさと、それこそ無残に様相を展開させるがごとく壊していった恐怖と悲劇というものを私たちは決して忘れてはいけない。その歴史を遠い過去のことにしてしまおうと、もし思う人がいるならば、今一度どうかみなさん、あの時代の恐怖と苦しみの歴史を振り返ってみてください。そして人間としての尊厳をもう一度見直してください。そうでないと《核の時代》と言われる今の苦しい世の中を乗り越えて皆さんの将来が明るいものとは決してなりません。私は冒頭にそれを若者にまず訴えたいと思います。

S

返るに一九一四年、ずっとずっと昔です。第一次世界大戦が始まろうとしていたときに、ドイツの作家ヘルマン・ヘッセは、平和についてこのような詩を書きました。「みんなそれを持っていた。だけど誰もそれを大切にしなかった。ああ、平和という名はどんな叫びをどんな響きを持つことだろう。」開戦の時が来ました。ヘッセは戦争に反対しました。いよいよ開戦、学者も作家も感動的に愛国心を煽り、そして反対をしたヘッセに対しても、国を売ったやつだとのしりを与え、迫害を与えたといえます。そのときヘッセは一人大声を上げて反対し、自分の住んでいたスイスの新聞に書きたてました。「愛は憎しみより美しく、理解は怒りより高く、平和は戦争より高貴だ」。このような詩を書きました。でも戦争は終わることはありません。遂に一九四五年終結のときを迎えました。ヘッセは地球市民的な思いの大変強い人物だったといえます。彼は「平和に向かつて」という詩を今度は発表しました。「平和だ、だが心にはあえて誰も喜ほうとしない、心には悲しみのほうがずっと近いのだ。あわれなわれわれ人間は良いことも悪いこともできる動物であると同時に神々なのだ。」と、そう叫びました。そして翌年一九四六年に、彼はノーベル平和賞を受賞しています。

北朝鮮やイランの核の問題が今や地球を駆け巡っています。世界の指導者ももっと核の脅威を学ぶべきである、そ

してかつてヘッセが全地球市民的な思いで戦争に反対したのと同じように、国益を超えて全人類のために国を愛する、人類を愛するそういう指導者が早く早く多く世界に誕生してくれることを私は願わずにおれません。

§

一九四五年の長崎はどうであつたでしょう。確かに終戦のときを迎えました。ヘッセが言ったように、誰も喜ぼうとしない、そこには涙ばかりでした。廃墟と化した長崎の街に多くの子供を失くし信者を失くし、そして友人を失くした多くの人々がみずぼらしい姿を、そして街の至るところに、「あらー、あの写真屋さんのご主人亡くなつたんだつてね、あのお醤油屋さんの子供もだつてよ。ねえ、いまさら戦争が終わつたつて私たちにどうすればいいの。何もかもないじゃないのよ。」こういう会話が至るところで、子供の私の耳に入つてきました。戦争が終わつたといつて、なんの喜びもないそしてなんの感動も生まれてこなかつた。

私の一番上兄の十四歳の長男は、「お父さん、僕は日本が戦争に負けたとは信じられない。僕が国のために、兄弟のために親のために戦つてくるよ。あの海行かばの軍歌を歌つて僕を送つてくれないか。」長男は父にせがみ、そして最後に親に軍歌を歌わせて、十四歳の命は軍国の少年として飛び立ちました。「海行かばみずくかばね山行かば草むすかばね」海へ行つても山へ行つても遺体がごろごろつと、そういう意味なんです。当初はこの歌は戦果を仰ぎ、国民の精神を高めるために作られた歌だと聞いております。しかし後には日本の、最後の日に近い頃、敵によつて飛行機が撃墜され、船が撃沈された、その哀悼の意味を持つて、この「海行かば」という歌は演奏されたと聞いております。実に不思議な歌の流れを持った歌だなあと、私は後々に考えました。

そうして至るところに戦争の悲劇と原爆の悲惨な状況は、その構造を呈していったのです。もつとも記憶に新しいことに、被爆者という新しい人間の存在が出現したということです。被爆者、これまでに聞いたことのない、哲学の

歴史も存在論史の中にもかつて被爆者という人間の存在を聞いたことがない。新しい出現であると思わざるをえなかつたというように思われていたそうです。私たちは今、被爆者であるとか、被爆者の問題を考えようとするとき、自分を離れたまつたく別人のこととして、誰でもがそのことを考えてみようと思つてみます。しかし皆さん、決して忘れないうでください。そのことはこの核時代の中にあつて、決して人事ではないということです。むしろ被爆者と被爆者問題を考えるということは、今に生きるこれから生きていく皆さんの、人間としての人間の、それこそ状況を学ぶ唯一の手段であるというように考えていただかなければ、追いつかないものではないかと思ひます。

S

広島・長崎の原爆・戦争の歴史は確かに六十一年前の悲劇でした。しかしながら、それは核時代から考えてみると、将来の、人類の暗示であるかもしれない。そしてまた、かつての被爆者のあの苦悩と悲劇は、どう考えてみても、地球人類の、明日の姿であるかもしれないということを私たちは決して忘れてはいけなうと思ひます。それはたとえば、わが愛する人・愛する家族が亡くなつた、小さな子供を胸に抱いて途方にくれる親がなんとも無力感に苛まされて、途方にくれる姿、今や現代医学は進歩・発達してなんの不自由のない病氣をしても医療は充美をしております。

しかし核兵器の前にあつて、その進んだ医学にあつても医療も全くものを言わせない、これを現実の姿であつたといふことを私たちは記憶から忘れてはいけなうと思つてゐるんです。そして科学はどんどんと振興しました。皆さんと同じように、その科学や技術の進歩によつて大変高度な教育が受けられるようになり、そのおかげによつて健康的にそして豊かに暮らす機会が与えられ、数多くの情報を身につけていく、すなわち平和のうちに生きていくだけの準備は今十分に整つてゐると考えてもらつてもいいかと思ひます。

しかしながら、そこでまた忘れてならないことには、その科学も技術も、あるいは環境のエネルギーも過剰の使い

果たしにより、そして自然の資源も無駄に使われ、それゆえに環境はめちゃめちゃに破壊され、我々の知らないところで生態系の破壊にまで及んでいるという現実を知ったときに、我々の未来は、そして我々に続く多くの子孫たちは、一体どのようになるんだろう、これが実は平和学を学んでいこうとする原点となるのではないかと、私はそのように考えています。

パスカルは言いました。「人間は弱い一本の葦に過ぎない。自然の中で最も弱い存在である。けれどもそれは、考えることのできる一本の葦だ。人間は孤独だ。人間は弱い。だけど考えることのできるという点においては人間には偉大さがあり、尊厳がある。」そのような言葉をパスカルのパンセの中に記されており、私たちは思考する存在としてこの世に誕生しております。多くに心を開き、そして多くに目を輝かせて自分の取り巻く自分の行く末を見つめていく、これが大学生として生きていく皆さんのもつとも感じられる視点ではないかと、私は思っております。

考えてみましょう。一九八六年にノーベル平和賞を受けた、かつてのエリ・ヴィーゼルという作家がいます。彼は私たちにこういう言葉を残しています。「皆さん、どうか人の言葉と違って無頓着にならないでください。愛の反対の言葉は憎しみではなく、無頓着の精神なんです。」彼はそう訴えました。それもそのはず、エリ・ヴィーゼルは十六歳の時にアウシュビッツの収容所に連行されました。何回も何回も収容所を転々とさせられ、そしてその度にまるで虫けらのように罪なきユダヤの人々が、毎日何百人と処理をさせられるという形で殺害をされていった。若きヴィーゼルはそれをじっと見ていました。幸か不幸か幸いなことに、終戦のぎりぎりの時にヴィーゼルはあのアウシュビッツを生還して戻ることができました。彼の脳裏に焼きついたあの悲惨な現実、それを彼はまさまじとその苦しみの表現と憎しみの表現を三部作に発表いたしました。一九五八年には『夜』、一九六〇年には『夜明け』、そしてその翌年には『昼』という作品を発表しております。これはまさにユダヤの人々があの無残な最期を遂げていったその慰霊をすゝめるための記念碑ともなるべき有名な三部作だと聞いております。至るところに暴力的なそして残酷な戦争の悲劇は、

何をかいわんや。

ジョセフ・ロットブラッドという一人の偉大なる科学者はかつてまた彼もマンハッタン計画に肩を押し、そしてその中で原爆開発の必要をみなくなった。そのことから多くの人に裏切り者と言われ、そして帰国の途中に自分の妻はアウシュビッツの被害者となつたわけです。彼は何にもしてやれることがなかつた、その頃彼の耳に聞こえてきたスターリンの言葉がありました。これは有名な言葉です。「一人の人間の死は悲劇である。百万人の人間の死は資料であり統計である。」その言葉がジョセフの耳に届いたときに、彼の胸はかきむしられるような想いと失意にめりこんでしまつたといわれています。しばらくは呆然とし、わが身を立て直すこともできなかつた。「ならば我が妻はアウシュビッツの六百万分の一の資料であり統計にされたのか」と思ったときに、彼の悲痛な思いはとどまるところがなかつた。

しかし彼はそれから世の中世界を見つめ直し、なんとしても私は人類の愛に目覚めそして核廃絶と戦争の絶滅に力を注ぐと自らを奮い立たせて私たちの知らない地球の裏側で世界平和のために五十年間の歳月を人類の幸福のために身を尽くし、二〇〇五年八月三十日ですからつい最近です、九十六歳の生涯を閉じられた。大変に偉大なる科学者です。

その一つ一つを知り得た時、われわれは今生きてる人間として戦争を起こさないために何が出来るのか、何を見つけて何を考えていかなければいけないのかということ而努力していくことは当然の事です。私自身は過去と現在と未来の三段に分けてその思いを何とか達成をさせたいなど、本当に耳かきいっぱいの思いです。でも過去に対するその責任というものは、あのかつて一億人とも言われた世界の大戦争の中で亡くなった多くの人々の、その上に立つた今日の平和であればその死を決して無駄にはしていけない。不戦の誓いを持つ事が、過去の悲劇の主人公たちに報いる唯一の責任ではないか、そしてまた現在の責任においては、地球上には一日に一ドルも使えないような大変貧困に苦しんでいる多くの人々がいます。生まれたばかりでまともな食事を口にすることができない、注射の一本も与えられずに

亡くなっていく幼い命、その状況の中に今戦争が起こればまるで拍車を掛けたようにして彼らの貧困はもつともっと進んでいくのではないか、そのことを考えたときに私は情熱の一角としてでも、なんとしてでも戦争というものを再び起こしていけない。その想いが強く募ってくるのです。

未来に対しては当然皆さんの将来です。私の体験した長崎の原爆の悲劇を二度と再び起こさない、その想いは、未来に向かつて生きていこうとする若者の想いと亡くなった過去の若い子供たち、そして大人も含めてすべて地獄の中で火の中煙の中を逃げ惑い誰の助けも得られないままに死んでいった地獄の中の境地を絶対に忘れないということが、私たちのもつ平和観念です。私たちは二十世紀の中に起こったいろいろな暴力的な残虐的なその死を、そして死の感受性を感じ取り培うことによって、絶対に世界に戦争を起こしてはいけない、核兵器の開発なんて以ての外だという心からのそれこそ腹の底から叫びと徹すほどの想いは、過去の残虐をそしてその悲痛な叫びの声を身をもって知る事からしか伝わることはできないのではないか、そのように思います。

長崎の原爆の地獄は当然のことながら生活居住空間をいっぺんにして無くしました。そして社会の機能も政治も経済も医療も消防も、そして家庭も学校もすべてのものが一瞬にして破壊されました。その破壊された根源にいったいどのようなことがおこったか、原爆の落下した中心にそれこそ死の恐怖とも言われる死の遠景がそこに誕生いたしました。五〇〇メートル一〇〇〇メートル一五〇〇メートルというように、その同心円の中で人々は自分の目に光が届いたとき人間としての暮らしが出来ず地獄の底に落ちていくような、そういう悲劇が起きたということです。私たちのそれまでの社会の常識を破って、その死の同心円の中で私は一キロ以内にはまりこめさせられた。そしてその地中に埋まった体は幸か不幸か幸いにも私を救出してくれたひとりの恩人によって我が命を救い出される事がありました。でも人間というものは親が年をとって自分の育てた子供がどんどん成長していつて、じゅんぐりじゅんぐりとそれこそ順序正しい死の秩序というものはあります。特別な事を除いてはたいたいその秩序によつて人間の暮らしは

保たれています。しかし原爆の死の同心円というものは容赦なく若いも若きもその社会秩序もすべてを崩してまるでこれが人間かという悲劇がそこに誕生したということです。暴力の死ということになればそこには必ず残虐が生まれます。壊れた建物の下になつて人々はもうすでに亡くなつてゐる。その上を無数の瓦やガラスが飛び交う何百というものがその亡くなつた体に刺し込んでしまふ。その上は何千度という熱線が照射する。死んでゐるんだからもうそれ以上必要ないでしょう。それが残虐なんですね。はかり知る事の出来ない、そして想像を絶する超絶的な体験が長崎の原爆の体験だという事です。その中を生きることも、そして死ぬ事も一生懸命と何も考えずただ呆然と立ち尽くした被爆した大地の中で、仮に我が手をさし伸ばして助けを求めたとしても誰もその手に手を携えてくれる者はいなかつた。

そうして人々は、何がそこに起こつたか、人間の生きる事と死ぬ事の価値観の逆転作用が生まれたという事です。私は何故生き残つたのか、あの苦しい状況で何故あの人を助けてやらなかつたのか、生きることが喜びであるはずの通常の人間の感覚の生きる価値観が原爆のその体験によつては、その苦しみをともに助けてやる事のできなかつたという負い目、これが心の強い傷となり重荷となつてその後を行き抜かなければ行けなかつたということです。そして苦しい原爆の体験というものは、生きる事と死ぬ事の、そして生きることが助かつていこうとするときに人間が人間としての心を持つて生きられない人間の理性もそれこそ優しさも愛情もすべてを横にして自らの背後から迫り来る火を逃げていくには逃げていかなければ自分を助ける事ができなかつた、それらのことがすべて後々になつて人間の、それこそにち思い苦しみの後悔の念が生まれてくるということです。

§

しかし後悔の念がいくら生まれてきたからといって、それをそのままにしてただただ日を送つて六十一年生きてこ

んな馬鹿な事はありません。どこかで人間は自分が生きたということ、その道を模索していかなければならない。これが私は原爆を、あるいは平和を学ぶ皆さんのこれから社会人となっていく人々に対しての生き様の学びのきっかけになるのではないかと思います。わたしはその苦しみの中でどうしても過去の有名な人物を自分の歩む道に取り入れざるを得ない。

それがモンテニユーがひとりです。モンテニユーはこう言いました。「運命は人間に不幸や幸福を与えるわけではないんだ。ただ素材と種子を提供しているに過ぎない。それを我々より強い我々の心が、幸にも不幸にもする。ときには変えたりときにはそれを用いたり、それはすべて自分の心がなすべさだ、自分の心が全部支配するんだ」そういう言葉を彼は残しているんです。私がある程度おとなになったとき、このモンテニユーの言葉は「そうか、運命というものはこれほどのこういうことをして切り替えることができるのか、私も大変な失意のどん底と貧乏のどん底と、とるものを取り合えないなんとするともできないようなその状況の中に置かれてしまいました。そのときこのモンテニユーの運命というものに対する考え方というものが私にいつばう勇気付けました。

もう一人はマキアベリです。これはイタリヤ・フィレンツェの政治学の祖といわれた人の有名な言葉です。「運命は半分は、運命が人間を支配するだろう。しかし残りの半分はまた人間に委ねているだろう。」そうするとありがたいじゃないですか。苦しい苦しい、私は悔いてるといっただけではなくって、そのように運命だつて弱いんだつて人間にそれを携えているんだつていうことになる、われはこれは運命のためだこれはどうだというだけではなくて、そのことに向かつて立ち向かう強い精神が無くてはいけないと思います。私は絶望の中から勇氣とそして判断と段階を追つて手探りで自分をなんとかこの悲痛な苦しみや悲しみの運命から逃れようと努力をしたときがありました。そうして私はこの二人の言葉を自分の生きる支えともしました。これは私の精神の中を支えるのです。いろんな状況がある、下手すれば運命の別かれ道のときにつかむ自分の道がもし間違つていくとしたならば、あのように長崎の原爆の暴力

的な地獄の中で人間が、それはそれとして生きていくとしたら、それは優しみも無く人を思つ心も無い何にも無い人間としてどんどん成長していくだろうと私は思います。それを運命のせいにしてはいけない。これは若い皆さんが十分に理解する事のできる、かつてはベートーベンの人生もそうだったんです。彼は耳が不自由で、とても作曲などしておれる状況ではなかった、とても彼の青春時代の中には苦しみもがいたと聞いております。そのときに、「運命よ汝の姿を示せ」と彼は思い切り叫んだそうです。あまりの悲痛な苦しみにそのとき彼の耳元に聞こえてきた「ベートーベンよお前は、お前だけのために生きるのではない、万人のために生きるのだ」と、どこからともなく聞こえてきたかのようなその声にベートーベンはパツと目が覚めた。あの『運命』というそれこそ「ババババーン」響き渡るようなあの有名な曲の出だしは運命はこのようにして扉を開けてやってくるという注釈を付けたと聞いております。

S

私は一つ一つのそういう運命と戦ってきた苦しい偉大なる人物たちの姿をまるで目の当たりにするかのようによろしく読める先人の声の中から聞いたときにひそかに失意のどん底の中でも感動を得ます。私の楽しみはそぞろ読み行く書物の中に、われと等しき人をみしとき、誰もそこに指導してくれる人もいない孤独にうちめぐらしている、でも一冊の本にめぐり合うそぞろ読み行く中に自分と同じような方が、「あー、この人も同じような想いを持っていてくれたのか」というものにめぐり合ったとき、自分はなにかそれこそ百人の友を得たような喜びになる。ここに私は皆さんに申し伝えたい、学ぶ事の素晴らしさ、学ぶ事の偉大さ、それが私の長崎の原爆の体験の中から生まれました。それは何故か、私の戦後の復興の一番の大切さは医療の改革と教育の改革です。今で言う教育改革とはわけが違ふんです。教育の進歩と医療の進歩がなければ、私は今の皆さんの前に立たせていただくことはできませんでした。先ずそれはどうということか、原爆を受けて住む家も無く私たち家族はみすばらしい姿をしながら島原へ逃げていつ

たんです。雲仙の麓の島原半島、その中で私は先ず自分の子供としての、教育の中の教育と養育とそして食育の三つを学ぶまさに民俗学的な旅に出たようでした。ちょうど原爆が落ちて二ヶ月あまりした秋の暮れ、雲仙の山には山札というものが昔おろされていたんです。今で言う交通手形のような、観光地に売つてあるでしょ？子供たちがよく買う、あの札よりもちよつと大きめな札に入山許可書というものがある。それを避難してお世話になつていた家へ一角を借りていた、それこそ主人が馬を飼つていました。おおきな農園でした。その馬の首に札をぶら下げてそしてかみで編んだ籠を馬の背中に乗せて、そして私が馬の背中に座らせられてもいいように杵を作るんです。その上に座布団を敷いて、「わりやこの上に乗つとけ」となんといわれても急激な原爆の衝撃は六歳の私に、人と笑顔を持つて話をしたい言葉を掛け合うというようになつた。その孤独な想いを六歳の私は大人のように表現も出来ない、「わいも寂しかやろうなあ」と田舎のじいちゃんがそう言つと、ただそれだけで涙が落ちてくる。声も掛けられんと、そういう状況の中にその山札を持つて山にきのこを探りに行く山の雑木林で雑木を取りいく冬の支度です。そして連れて行かれて山へ行く、そうするともう雲仙の裏山は九月末十月となると結構寒いです。馬の鼻から鼻息がパツ飛ぶんです。おじんが馬の手綱をひいて私を馬の背中に乗せて行きます。そのとき私は驚きました。そのおじさんが引つ張つて馬のその足元に、私が大好きなきのこが生えているんです。「おじん、きのこ」と私が言つと、「どこや、そこん足とけ？」と。私は差別を逃れるために一所懸命島原弁を覚えました。そうするとそのおじんは、手綱を止めてこうして見た。「ああそうか、そこ動いたら踏んづけてしまう。わいも降りて来てきのこば探れや。話ばしてもな、人も返事もでけんやつたとに、今は大きな声でおじんば呼んだじやなかな。いつもそげん元氣は出して話ばせんばいけんばい」と、おじさんは私にそう言いました。馬の背中からほんと降ろされて、そうしてきのこを雑木林で拾うんです。かずらの籠にほどほどの、そしてひのきの葉っぱを敷いておじいちゃんはきのこをまとめてくれました。帰つ

たらたつた貧しいかけうどんの中に、まだ生き残っていてくれた母が必死にきのこうどんを作ってくれた。これが私の命綱となりました。おっちゃんはそのから私にいつも山へ行くときは、私を馬に乗せて山へ連れて行ってくれました。自然というものはあの無口であつた、そして何を考えてどういふ孤独に落ちこんでいるかわからない私の子供の心に、自然は私にもすごい雄大な心を与えました。明るさを与えました。「昨日のうどんはうまかつたか?」「そりやうまかつた」とつてもおいしかったということですね。そうして私の口はどんどん開いていくようになります。

子供にも経済力がありました。その農家の主人の子供たちは私と同年でした。すいかを刈り取る残りがまだ畑には混在していました。私はすいかというものをまだ食べた事がなかつた。スイカを食べたか。私がそう言うつと、その次男坊の息子が「からすがつづいたのを食べや」つて、からすが朝からスイカを食べに来る。ふつうの新しいのは売つて商売になる。勤勞の喜びと働く事の大切さを、もう子供たちはその頃からわかっていたんですね。私は後になつて思い出して、本当に何か心がほのぼのとするような想いになります。そうして私のこころはどんどん明るさを増してきました。どうすれば人に喜びを与えられるんだろう?どうすれば自分の思いを伝えていく事ができるんだろう?だんだんと私はそのような方向にながつていったのではないかと思ひます。

そうして自分の生と死を立て直すのと同時に、私にはいくつもの難題が迫っていました。今度は健康の問題と闘つていかなければならない。わけのわからない問題というものは、私の体を放射能という形で蝕んでいきます。フラフラとたつてものを考えることも出来ない。それを知らない人間は、「この人はサボりもんだ。仕事をしたくないからただぶらぶらやつているんだ。」と、そういう心無い言葉の闘いを私は自分の精神の中からひとつひとつ消し去つていかなければならないという作業が私の中に残つてきたんです。どうすることもできない。これは私だけでの力ではどうする事もできない。あるとき柿の実を見たとき、田舎のご主人が「柿にはビタミンCがいっぱい含まれている。こ

れを食べたら少しは元気になるじゃないか？」と、一個の柿の実を持ってきてくれました。ビタミンCがある、ひとつひとつの言葉の中から私は食育と人間を養っている養育とそしてものを知る事の出来る教育という三つ巴のなかから、ひとつひとつの知識を私は勝ち取っていくことができたと思っんです。

何はともあれ、人が一人死に二人死に、家族ががらうんとなつていくあげくのはてに親も兄弟も全部亡くなった、私は原爆の家族のなかで私は一人だけ生き残りになりました。その一人生き残った人間が自分の行く未を、そして自分の生きる道をどう切り開いていかなければならないかという事は、これは最大の課題です。これは私はなんのかつこつけではない、皆さんどうか学べる機会があったら学んでくださいということなんです。私にもし学ぶという、学業をするというそのところが無かつたとしたら私に何ができたろうか、米百俵の話ではあります。今日の米を食べられる事よりも、未来の米をつくるそのことを学ぶ世界、私はそれが求められました。学びました。それこそ電気も無ければ水道もない、机も無い、昼間しか学ぶ時間も無い、そこに自分がどう集中力を持つて教えられた事を自分の身に残していくか、これが私の自分の責任でした。それがまた私の運命でした。するとそこには人間味が生まれます。誰がなんと言おうとも今自分にはこれしかない。これを持ち越えた先には必ず光が待っているだろうと。苦難を乗り越えるときに、私はやはり未来を見通す明るい展望がなければ、人間というものはその動きを示していくことが出来ない。その喜びを時運の心の中に、この苦しみさえ乗り越えたらきつと先には明るい陽射しがまわっているだろうという目標を立てて進んでいくところに、とてつもない成果を自分自身が期待することができると。

いろんな本を読みました。小林一茶が私にまた一つの勇氣も与えました。それこそみずばらしい暮らしの中でも、彼のその才長けたその才能は私たちその後の多くの子供たちに素晴らしい歌をまた残してくれています。そのなかから生きるということの真髓と、そして心の中に平和をよみがえらせていく事の大切さを、彼もまた教えています。「我と来て 遊べや 親のない雀」「雀の子 そのけそこのけ お馬が通る」という、本当になんかかわいい彼の歌はな

んと研ぎ澄まされた感性によって私たちに受け継がれてきた事でしょうか。

私の原爆体験はその苦しみや悲しみや無残さだけではありません。その中から一人の人間が生き伸びて生き続けていくという事が、最大の課題であつたという事なんです。

アインシュタインはこう言いました。現代の世界の中で何が最も重要な課題か、東西の冷戦のときを見据えてずつとずつと考へて行き着いた末の彼の答えは、人類を滅亡から除外して滅亡をさせないためにそれが目標とするのであれば、他のすべての目標もそれこそ優先されなければいけないんだ。他のすべての目標を優先してでも、人類が滅亡しないためとしてわれわれは歩んでいくべきだと、まさに核兵器の問題を取り上げていたんですね。彼はそうして一所懸命に私たちの知らないところで自分の成し遂げた業績ゆえにすべての人類の責任を自分の一手に担わざるを得ない状況になつていった。国家も民族も超えて人類の事を全部自分の手中にという責任感を持つていたという。ましてや戦争や平和に関しての問題は、彼は自分の身に置き換えて考えざるを得なくなつていたという。それは彼の成し遂げてきた業績ゆえだつたんだという。そういうときに広島・長崎に原爆が落とされたということを聞いたとき、言葉を吐き捨てるように言つたそうです。「なんたることか、こんなことをするくらいならば私は科学者になるべきではなかつた。今度自分の暮らしを立てていこうとするときには、ブリキ職人か行商か、あるいは燈台守にでもなるだろう」ということを吐き捨てるようにいつたというエピソードも残つていくぐらいです。そして彼はまた一九二二年に、大正十一年に日本に来ています。その時彼が残した言葉は、「願わくば自らの偉大なる徳をけがさず保ち続け個人の欲望を抑えて感銘質素な態度で心の透明な静けさを守り通して欲しい」と。また出発の日には、「日本の家屋は非常に美しい。なんと自然とマッチしていることか。山水草木も実に見事だ。どうか欧州感染をされないように。この素晴らしい景色を守り続けてもらいたいものだ」と、彼はこのような言葉を残して日本を去つたと聞いております。それからどうでしょう。日本は、めっちゃめっちゃに外国から侵略されるわ、戦争には進むわ、日本の家屋どころか日本の

素朴な文化すらも年々になくなっていくようなそういう時代に入り込んでしまいました。また彼は彼の残した言葉の中に、私はその中に非常に大切な名言があること思い出しました。科学なき宗教は盲目である。宗教なき科学は不具である。この二つの彼の名言は実に今の世代を表しているのかなというように思うのが致します。

かつて今から四百五十年も昔になるでしょうか、ラブレールというそれこそ博学多彩の、フランス・ルネッサンス文学の代表者とも言われるラブレールは科学に対してこういう言葉を残しているんです。科学とは元々魂の善悪の観念である。魂の善悪の感電である。そのラブレールの言葉に沿ってバグウォットシユという会議では、ならば我々は呪いではなくて祝福となるような科学の発展を作りあげていく必要があるということから世界の科学者たちが集まって、カナダのバグウォットシユでバグウォットシユ会議というものが開かれた。そして人間と科学と知性という名において、人類の絶滅と反人間性と核兵器の絶滅戦争の撲滅をうたったバグウォットシユ会議宣言というものが出されたんです。これは日本の谷川徹三という哲学者によってアインシュタインの原則であつたと聞いております。いづれにしてもこのバグウォットシユ会議宣言の「ラッセル・アインシュタイン宣言」こそが十一人のそれこそ心高き科学者が集まり、これ以上核兵器が散乱する様なことがあつたら人類は滅亡だろう。なぜあのバグウォットシユ宣言の中に、人類の絶滅をなくすのか、それとも人類が戦争を放棄するのかという文言を導入した理由として科学者が作つた核兵器がそれで終わりではなくもつともつと発展・研究が進めばどんなにこれまで以上の核兵器が作られるかもしれないという恐怖と、そして人間がいったん勝ち得た核を造る能力は絶対にその記憶から抹殺する事はできないだろうと、だから人類が戦争を放棄して戦争を撲滅して戦争のない世界を作るために学ばない限り我々の人生は決して安泰ではないだろうということをこの十一名の有能なる科学者は人間と科学と知性の名において発表をしたということなんです。私たちは決してこのことを忘れてはいけなないと思います。研究した発明した本人が人類の絶滅につながるんだということをこれほど真剣に訴えているのに、何故世界はそうのように動いてはくれないのか私はそのことが非常に情けないと思いま

す。そうして彼らはその意気によつてバグウォッシュ会議の名文を果たした。その宣言文にアインシュタインが公式のサインをしたのがアインシュタインの最後の仕事となつたという事です。一九五七年、たしかこの年にアインシュタインは亡くなつてはいます。彼が公式文書として最後にサインをしたもつとも貴重な公式文書だと聞いております。

私たちはこういうことをどんどん勉強していく上になんとしても戦争を先ずなくす、そのためには平和文化構築が必要ではないかと思ひます。では平和文化とはいつたい何ぞや。エリー・ボーリングという人がその定義を発表しております。これは我々人間が創造的に違ひいわる差異に対応する創造的に差異に対応してそしてその資質を分かち合うというこれが平和文化構築の定義だと、そのように言われております。先ず弾圧とか戦争であるとかいう問題になると言論とか対話というものが先ず第一にストップがかかります。そうして私たちがはものが言えなくなつてしまふ。裏を返せば、対話にしても言論にしても、人間を信じそして愛する力によつてその対話を継続され、それゆゑに熟成をされて最後に勝ち創造の花が咲くと。これが平和文化の段階ではないかなと私は考えております。どうか皆さんお互いを信頼しあいましょう。そして語り合ひましょう。その中から必ず勝ち、創造の花が咲き生まれてくるはずだと、私はそのように考えております。

皆さんのこれからの行く末にて何が一番大切か。私が原爆から復興するとき、これは原爆の体験だけに限らず人間がある種のひとつの大きな出来事に出会つたときに、自分を立て直そうとするときに、人間の心に潜んでいる貧乏の存在を財宝の存在に切り替へることのできる能力を持たなければ、太刀打ちできない。私の原爆の復興の立ち上がりも、実は大人になつてから。いろんな人間の関係があり、やつとここまでやつたかなと、やればやつたで非難がある、やらなければやらないで「なんであいつはやらないんだ」という、どつちにしても人間の社会というものは本當にやつかないものだなあと私はずいぶん悩んだ日々がありました。しかしよくよく考えてみると人間にはもともと

大変金持ちになりたいなという願う人が多けれども、金持ちになるための要素をもっていない。偉い学者になりた
いなと思ひながら、学者になるための準備を自分が持つていない。それは何か、なにかの貧乏の精神がどこかに潜ん
でいるからであるということだ。それは何でしょう、まずひとの言葉の貧乏、心の貧乏、時間の貧乏、お金の貧乏、
この五つです。これらの貧乏を財宝に変える努力をしなかつたならば、私の今日はありませんでした。それはどうい
うことか、人の貧乏とは何ぞや。私と誰かが会う、私と会うことによつてその人が不愉快になる、それでは私という
人間は決して人としての貧乏を財宝に変えることは出来ない。少なくとも私と会つて、皆さんが私と会つて私の話し
を聴いてくれて、「ああ、あの人の話を聴いて僕は今日なんとなくさわやかやつた。よかつたなあ。」とも思つてく
れるとしたならば、私の人としての貧乏が少しは遠のいて少しは財宝に変わつていくだろう。言葉の貧乏もそうです。
有言実行無言実行どちらもいい。言つたら言つたなりのことをする、言わなくても実行すればそれもいい。ええ加
減な言葉が一番人から自分を助けてもらえない貧乏状態になるといふことです。このことは絶対皆さん忘れないで下
さい。私はそれによつてずいぶん助けられました。

そして今度は心の貧乏です。これが実は非常に難しい。人間というものは怖いものを見たとき逃げ出そうとします。
苦しいことがあつたらそこを抜け出そうとします。しかし人間がどのようなことに出会おうとも、絶対にぎりぎりの
ところでその倫理観と道徳心を忘れないということがもしてできるとすれば、これは素晴らしい財宝を築いたことにな
るのではないか、とても難しいことです。でもそれをやっぱり人間は努力していかなければならない。そうしてめぐ
りめぐつてきたときに、なんとなく自分の周囲にあるものが豊かな環境におかれていきます。そしてお金を見たとき、
自分の親たちが働いて自分たちに学費を納めてくれて、そして学校へ自分たちの足を運ばしてくれている。その勤勞
の喜びに対する感謝と、そして毎日不自由なく育てはぐくんでいるんだという思いに、自分の感謝の心が生まれたと
き、なんとも金持ちになるじゃないですか。ものがあるから金持ち無いから貧乏じゃあないんです。あつてもとても

心の貧しい人はいます。無くて心の豊かな人もいます。どちらが最終的に本当の意味の人間を裕福な人間として残すだろうかと考えたときに、私は皆さんにそのやりとりを研究していただきたいなと思います。

§

人間は腹がすくと怒りが生まれます。怒りが生まれると暴力も振るいたくなる。人に言うことも聞かれなくなる。なんといつても私は平和学を学ぶその始まりの第一歩はやつぱり平和文化の構築じゃないかなと。それは私がつとも基本として学んだガンジーであり、マーチン・ルーサー・キング・ジュニアという、この二人の人物は私に壮大な精神を与えてくれるきつかけとなりました。それこそ読むこと聞くことに一度もお会いしたことがない二人が私の人間を引っ張ってくれる唯一の何にも無い状況の中で、その学びの中で出会った二人の思想、これは私に生きる勇気を与えてくれました。アインシュタインはガンジーに手紙を書いていきます。一九三一年あなたはあなたの持つ非暴力の精神によって戦闘を暴力に委ねることなく取り押さえることのできる偉大なる力があることを私たちに指し示してくださいました。私はあなたのその偉大なる心に対して大変尊敬致しております。ぜひ一度お目にかかりたいという手紙を、短い手紙でもアインシュタインはガンジーに出しているんですね。そうするとガンジーは「あなたの美しい手紙に私は大変幸せな思いをしました。私のとつている行動にあなたの眼から見てそれほどの賛同をしていたかということに、どんなに私は幸せでしょう。ぜひ近々お目にかかりましょう。」と、そういつて手紙を出した。結果的に二人はめぐり合うことが出来なかつた。一九四八年にガンジーは凶弾に倒れました。

ちよつどその頃被爆の長崎の大地で、私の父は私に言いました。「ガンジーさんがとうとう亡くなつた。偉い人やぞー。ガンジーさんは偉い人やつたんや。」と。私はまだ小学生でした。ガンジーが誰か、誰が偉いのか、そんなものは関係なかつた。だけどそれから数年して父は肝臓にがんが発生して亡くなりました。そのとき私は父親がとても恋

しくなりました。泣いても帰るものでもない、そのときふと、あのマハトマ・ガンジーが凶弾に倒れたときのことを、父が私に何気なく言ったことを思い出しました。父があればほどほめていたガンジーはどんな人だろう、それから私のガンジーの研究が始まりました。父とめぐり合うことが出来たような感動でした。彼のすばらしい、そして裕福なインドの世界からは見えない、貧困のインドの中に自分の身を置いて同じインドの姿を見たときに、彼はなんともその素晴らしい思想の中に、彼の非暴力の精神は生まれていったのだと私は思っております。壮大なる精神は自分の身を粉にして、そして自分というものではなく全ての人のために、全てのインドの人のためにしては世界の人類のために全部が頑張つてそうしています。私が肩の骨を三本骨折したので痛みがあるが、それぐらいで今日のこの貴重な時間を皆さんから私がお断りするようなことがあったら、私が学んだガンジーがさぞ泣くだろう。私は絶対に出席をしなければならぬ。滑つたとたん痛みが全身を走りました。ああ、大学での私にお話しはもうできないかなと一瞬悩みました。ズキズキと痛む。そして正月が明けて痛み止めを飲んでみると大体二時間から三時間効くんですね。これならできるわ。私は先生に連絡を差し上げました。「歯がないから言葉が十分聞こえるかどうでしょう。」と、電話の先で失礼でしたが、そういうふうに言いました。そして「あんまりおかわりないですよ」という言葉の勇気を頂いて、今日こうして皆さんの前に立たせていただきました。

§

人間やる気があればなんだつて出来るんです。私は有言実行無言実行どちらでもいいと先ほど言いました。これがただただ、私がここに立つて話すことが皆さんの平和学習や平和の講演であります。それを身をもって指し示す事も、私は人間のやる気を皆さんに与える一つのきっかけになればいいなと思います。今二トトが増えています。なんですかあれは！やる気を持つて欲しい。私たちの頃は二トトどころじゃありません。探しても探しても、足を棒にして

でも職はなかった。そんな時、夜の十二時を過ぎてでもそれこそ足を棒にしても職のお願いにまわったものです。そんな時の状況から比べると、皆さん豊かな暮らしの中で、親に月謝を出させて、そして素晴らしい最高学歴の勉強をさせてもらっている事を誇りに思つて、どうか頑張りをもつともつと別の角度で有意義にされてください。被爆の中から這い上がって生きてきた人間だからこそ言えるものでなければ本物じゃあないと私は思つてゐるんです。自分も怪我をした、それも息も絶え絶えというならこれは別です。しかしなんとか方法をとればなんとかできました。おかげさまで私どうか、あと時間も少なくなつてきましたけれど、お役目が果たせるかなということになりました。明日の手術もきつと上手くいくだろうと思ひます。大体四時間かかるといわれています。骨が三本折れたんです。私ほもともと心臓が弱いです。ですからリスクは大変高いといわれました。しかし私はそれはやつてのけようと思ひます。それはなぜか。私にはまだしなければならぬ約束事がまだいっぱいあるからです。平和のためにもつともつといろいろ調べてみたい事もあります。やり残した事もいっぱいある。そんな時に私はお正月の始めのお話にこの大学へお呼びいただいた、高い壇からみなさんにみつともない姿でお話しをさせていたたくという、本当に生意気な人間であるようですけれど、それはお許しを頂きたい。

どんなに人間が苦しくて、そして皆さんが自分の想いが将来どんなに絶望的と思へるような状況のときでも、九割九分九厘絶望はあつても絶望でないということ、どうか私の体験からそれは唯一の訴える事のできる言葉です。私も何回も死に損ないました。頭がばあになつて、教えられる事が何にもわからなかつた。まず教育を受けることに、それに闘わなければならなかつた。それをなんとか乗り越えることが出来ました。乗り越えて次の学校へ行こうとしたときにお金がない。これも育英会の資金が調達できるようになつて、そうしてやつとみんなと一緒に肩を並べて勉強する事ができるようになりました。やつと勉強できるようになつたかと思つたら、今度はのどにガンが発生しました。今度は声が出ない。声が出ない人間に何が出来るか。私はもう断崖絶壁に立ちました。絶望のきわみでした。そのと

きには親もいませんでした。訴える、慰めてくれる人もなかった。しかしそのときに、運命との戦いというあのモンテニユーの言葉。思い出しました。運命とは自分で切り替える事が出来るという事です。それはまた切り替えなければ人間は簡単に生きていけないと思います。どうか皆さん、弱音をはかないで頑張っていてほしい。

そしてガンからの克服です。声は出ない。ヘレン・ケラーと出会いました。ヘレン・ケラーは三つの苦しみを持っていました。目も耳も口も不自由な、それでも世界の人々に平和を発信し続けました。私は長崎に彼女がみえた時間にお会いしました。汚れくさった、でもそのときには勇気が湧いていました。小走りで彼女の元に走り寄りました。「美しい長崎の街が一日でも早くよみがえるように、皆さんの健康と幸せを願っております。」と彼女が言われたときに、小さな小学生の私の胸に最も尊敬する人としてヘレン・ケラーが宿りました。私にもやれる、リハビリに励みました。四ヶ月目に声が出るようになりました。これが今の声です。感動的でした。

土の中から掘り出され一回目、そして馬鹿といわれて能力を開発した二回目、三回目は声がなくなつてガンからの復帰、二度の障害を乗り越えてすべて三回とも絶望だといわれていました。「もうこんなにも教えてももののわからぬい、どうしてあなたは解つてくれないの」と、当時の担任の先生が涙を流してそう私に訴えた日々もありました。でもその先生は何故涙を流したんだろう。彼女の心に想う人は兵隊に取られて婚約者は戦地に、引き裂かれていた。だから意地と張りでなんとか戦後の子供にという思いがあったんでしょう。やがて三十四年したときに婚約者は復員して帰られました。そのとき右手だったか左手だったか、私はそれはよく知らないんですけど腕が無くなつて傷痍軍人として帰えられました。彼女は結婚されました。その翌々年だったでしょうか、長崎の原爆記念式典のところで、ぱつたりと私の母とその先生がお会いして、そのとき嬉しいじゃありませんか、あのどんぐり目玉から涙を流して「なんであなたはわからんの」と教えてくれたあの先生が、「幸子さんお元気ですか？」と言つて、私のことを覚えてくれていた。母とその女性教師は手を取り合つて、あの松山の原爆公園で「本当にお互い苦しい事がいっぱいありま

したね」と。「でもよかったですね」と、そうやって手を取り合つて涙で交わしたと母は言っていました。

私にはいくつもの恩師がありました。皆さん、じぶんが一人で大人になつたわけではありません。皆さんの巡つた一つ二つの教えの師である人を、自分の生涯の師とし宝として私は忘れるべきではないと思います。私の部屋には小学校六年生の卒業の時の、肩を組んだ私と教師の写真がたてかけられております。それは私のもっとも苦しいときにもっとも深い言葉を掛けてくれた恩師です。当然今は亡くなつています。師弟の愛は親子の愛よりも深いといひます。

どうか皆さん、今こうして長崎大学に在学中です、あなたがたしかできないことがあるんです。そしてあなた方の時代だからこそ、いろんな知識を持つて自分たちの子供に伝達する事もできるのです。私の時には、親は教えてやりたくても食べていけることで精一杯、今日の飯があるかな、明日の仕事が見つかるかな、そしてこの子は助かるかな、それでめいっばいです。私は塩昆布を二十円買つて、私は何日も塩昆布だけでご飯を食べていた事もあります。その塩昆布が二十円持つて買ひ物にいけるわけではないのです。通い帳を付けて買わなければ買ふこともできない。私は思ひました、「早く大きくなつて、私の最大の目標はこのすさんだ失意のどん底にある生活で両親に美味しいご飯を、そして小さくてもいいからささやける家に住まわせてやりたい。それが私の目標で、私は一生懸命に努力をしました。努力の始まり、朝五時に起きてパン屋さんへ行つて饅頭を運んで今の長崎新聞社の前の道、浦上川が通つています。あの橋を渡ると戦後にはいっばい店が並んでいました。そこへ毎朝五時に饅頭を運ぶ、そして戻つてくる。朝飯をかき込むかどうかして、そして歩いて学校へ行く。そうすると定期券代が助かる。一つ二つを全部そのようにして私は自分の目標につなげて参りました。

今時代が違つといえはそれまでです。しかし人間の心意気というものは、時代が変わろうと変わるまいと私は同じことだと思ひます。今皆さんが考える皆さんの心の中の悩みも私には理解できます。昔の子供の心の中の思いも当然私は理解できます。時代が変わるからといって人間の心もほとんど変わらないわけではないと思ひます。今は今の時代で

若者がどんなに悪戦苦闘してるかということもわかります。

世直しをしようじゃありませんか、みんなで力を合わせて。そのためには学びが大切です、私はそういうことが自分の苦しみと、そして腹の底から失意のどん底から這い出すためにはあらゆるものの苦勞をほとんどもめつくして参りました。友と別れる苦しみ、友から裏切られるせつなき、いろんなことがいっぱいありました。だけどそれはみんな許してやれる許容範囲です。それは何故か。そんなことに私が頓着する必要が無い、その努力の成果を私が作ったからです。それが無ければ人間は恨みつらみの思いにつながっていくのかもしれない。それでそういうことを考えたときに、私は皆さんに強い心を持って、そして強いだけでは駄目です。

やっぱり優しい心を持って、思いやりある心を持って、飛んでいって友の悩みに自分の胸を貸してやれるぐらいのそういう情熱も若者にあつてもいいんじゃないでしょうか。

私はとてもあつかましい勇氣を持っていました。自分のお世話になつた恩師がいるんです。ところが何にもお返しが出来ない、お金が足りない、てくてく歩いてそして会社の上司もそうです。今年までは何にもお礼が出来ません。

「出世払いにさせてください」という、私はそういう勇氣を持っていました。そして自分が一人前になつたときに、必ず有言実行ですから「その節はお世話になりました。」と、その事私は丁寧に続けてきたつもりです。そして何にも無い廃墟の中から生き残つた一人の人間がスプーン一杯の信用と愛情と、そしてやさしさと尊敬とそういうものを私は勝ち取ってきたのかなど。決して自慢できるようなお話ではありませんけれども、でもその結果はとても自分が幸せです。やっぱりそぞろ読み行く書物の中にわれと等しき人を見るときこれが本当に私に幸せをいっぱい運んでくれました。いい勉強が出来ました。一番苦しかった、一番悲しかった、いちばん切なかつた、一番どん底の中から私はさわやかなその思いを勝ち取る事ができたということなんです。

どうか皆さんそのことをひとつでもいいから役に立つ事があつたら皆さんのこれからの生き様の中に活用して、そ

してご自分たちが家庭を持たれたときにどうかこのことを話してみてください。かならずいい家庭が出来ると私は思
います。今日は本当にこんなぶしつけな失礼な姿で皆さんの前に立たせてもらって申し訳ない。ありがとうございます
でした。

(本稿は二〇〇七年一月十一日、長崎大学・「平和講座」にて行なわれた安井幸子さんの講演録である。)

《講演者・安井幸子(やすい・さちこ)さんのプロフィール》

一九三九年長崎市坂本町生まれ。一九四五年八月九日長崎にて被爆。父母兄妹の家族全員を原爆とその後遺症で失
う。現在長崎市在住。十三年前より語り部活動を始め、長崎平和推進協会の継承部会長を二〇〇五年四月から二〇〇
六年八月まで務めた。現在も長崎のみならず日本各地で講演している。

(テーパー・リライター 今山隆晴)